

五百木良三と『日本及日本人』（2013） On the Activities of Ryozo Ioki in “Nihon-oyobi-Nihonjin” (2013)

石川 徳幸¹
Noriyuki ISHIKAWA

¹ 日本大学法学部 Nihon University College of law

要旨…五百木良三（1871～1937）は、明治中期から昭和初期にかけて国粹主義の立場から言論活動ないしは政治活動を行った人物であるが、俳人としての知名度や政治活動家としての認知度に比べ、いわゆる「新聞人」としての五百木良三の活動はあまり知られていない。そこで、五百木良三が政教社の社長となり雑誌『日本及日本人』を主宰するようになった経緯と、雑誌においていかなる主張を展開したのかを明らかにした。総じて、五百木良三が政教社の社長時代に行った言論活動と政治活動に関する考察から、新聞人としての五百木良三を総括するとともに、メディア史研究において閑却されてきた三宅雪嶺退社以後の『日本及日本人』の位置づけを示した。

キーワード メディア史、五百木良三（飄亭）、政教社、日本及日本人、国体明徴運動

1. 問題の所在

本報告の目的は、五百木良三の昭和初期における言論活動を詳らかにし、彼が関与した雑誌『日本及日本人』がメディアとしていかなる性格を有していたのかを歴史的に位置付けることにある。なお、本報告の中では現在では使用されない表現が用いられる場合があるが、これは史料に掲載された表現をそのまま紹介することを重視したためであり、差別的な意図や特定の政治的思想を支持するためのものではないことを予め付言しておきたい。

五百木良三に関する先行研究は少なく、一般的な知名度もそれほど高いとはいえない¹。そこで、まずは研究の主題に五百木良三を掲げる意義を説明すべきだろう。五百木良三は飄亭と号した俳人であり、正岡子規からは「文学に於ける一種の天才²」と評されていた。しかし、五百木良三は新聞『日本』の記者時代に、貴族院議長であった近衛篤磨の知遇を得たことで政治活動に傾注するようになり、文学からは次第に離れていった。明治36年に近衛篤磨を戴いた政治組織「櫻田倶楽部」の設立に奔走した五百木良三は、新聞『日本』の編集長の立場を辞して、政治活動に専念することになる³。近衛篤磨の急逝により、櫻田倶楽部の当初の構想は頓挫したものの、五百木良三は以後も政治活動を続け、日露講和条約反対運動、日韓併合運動、満蒙独立運動、ロンドン軍縮条約反対運動、国体明徴運動といった「右翼」的な立場から政府を鞭撻する運動を展開していった。

これらの運動に関しては、現代の私たちの視点から見れば反省すべき過去を含むものであり、実際それぞれを論題とした先行研究の多くは教訓的な視座を持ってこれらを論じてきた。しかし、そうした視座のもとでは「右翼」による圧力に抵抗した人物の側にばかり焦点があてられ、戦前日本の社会に超国家主義的な思潮を瀰漫させた「右翼」側の研究が閑却されるという

¹ 五百木良三のことを扱った文献は、五百木と同時期に活躍した他の人物の研究書の中で触れているもの（例えば、山本茂樹（2001）『近衛篤磨』ミネルヴァ書房、山上次郎（1972）『歌人森田義郎と子規・飄亭』古川書房）や、同時代人による回想（例えば、阿部里雪（2004）『新編 子規門下の人々』愛媛新聞社）等が若干見られるものの、五百木を主題とした業績はこれまで見られなかった。しかし近年、本格的な評伝が上梓され、五百木良三の名が知られるようになってきている（松本健一（2012）『昭和史を陰で動かした男：忘れられたアジテーター・五百木飄亭』新潮選書）。松本書は『日本及日本人』の「五百木良三追悼号」の記述等を引いて詳しく五百木の活動を描いているが、本報告の射程である『日本及日本人』に関する部分においては既存の研究の域を出るものではなかった。本報告によって新たな知見を加えたい。なお、報告者がこれまでに公表してきた五百木良三に関する研究業績は以下のとおり。石川徳幸（2011）「五百木良三のジャーナリズム活動に関する一考察：『小日本』記者から『日本』編集長時代を中心に」日本マス・コミュニケーション学会・2011年度秋季研究発表会研究論文集（学会HP掲載）、石川徳幸（2013 a）「雑誌『東洋』と『日本週報』：日露開戦過程における対外硬派のメディア利用」（『出版研究』43号所収）、石川徳幸（2013 b）「対外硬派と櫻田倶楽部：小川平吉と五百木良三の活動を中心として」（『法政論叢』49巻2号所収）。

² 正岡子規（1913）『俳諧大要』友善堂、p175。

³ 櫻田倶楽部に関しては、前掲拙稿（2013 b）を参照されたい。

背理的状況に陥ってしまう⁴。こうした問題意識から近年、「右翼」ジャーナリズムの果たした役割を再検討する論考が見られるようになった⁵。終戦から70年近くが経った今、戦前の「右翼」的言説を先入観なしに分析し直すことは、日本の近代史を多角的にとらえる作業として今後さらに求められるだろう。この意味において、当該時期に「右翼」陣営において名を馳せた五百木良三の言論活動を詳らかにすることは⁶、メディア史のみならず日本近代史において重要な意味を持つと考えている。

さて一方、『日本及日本人』を発行した政教社に関する研究は多くの蓄積がある。しかし、それらは政教社の成立過程や設立メンバーに主眼を置いたものがほとんどであり、その射程は主として明治中期から後期にかけての政教社の活動に関するものである⁷。むしろ、三宅雪嶺が『日本及日本人』を離れた大正12年以降の大正期・昭和期の政教社に関しては、ほとんど考察の対象にされてこなかったと言える。それは、政教社に関する研究史をまとめた佐藤能丸の「政教社系とは、雑誌『日本人』と新聞『日本』、そして後にこれが思想的に合併した『日本及日本人』に拠った国粋主義思想集団で、時期は明治21年4月の『日本人』および『東京電報』（『日本』の前身）の創刊から、やや異論もあろうが、大正12年9月をもって三宅雪嶺が『日本及日本人』より離脱する迄の35年間に亘っているといつてよい⁸」といった記述からも明らかである。政教社の昭和期の活動を扱った業績には、管見の限りにおいて都築七郎（1974）『政教社の人びと』（行政通信社）と、有山輝雄（1977）「〈解題〉雑誌『日本人』・『日本及日本人』の変遷」（『雑誌『日本人』・『日本及日本人』目次総覧』I、日本近代史料研究会）があるものの、三宅雪嶺が離れてからの『日本及日本人』については学問的にほとんど等閑視されてきたといつてよい。例えば、松本三之介は「文芸方面では大正13年の復刊以後も、漢詩・俳句・和歌欄が中心をなし、その他には江戸時代の文芸・風俗などを扱った三田村鳶魚の寄稿や児玉花外の詩などが見られる程度で、とりあぐべき程のものも見出せない⁹」と指摘し、山田博光は「雪嶺と別れてからは右翼化の傾向を強め、神秘的国体論や戦争協力のウルトラ・ナショナリズムに陥っていった。（中略）全体として思想的偏向が著しく、文芸欄も見るとべきものがない¹⁰」と断じている。また、本山幸彦の見解のように、「『日本及日本人』は大正12年9月で終刊。翌月、同誌の後身として雪嶺により個人雑誌『我観』が創刊された。翌年、三井甲之らが創刊した同名の『日本及日本人』は極右の傾向雑誌で関係はない¹¹」と、後継誌として扱う事を忌避する嫌いさえあるのである。これらの指摘に共通する認識は、三宅雪嶺の離脱によって初期の『日本人』から続いた思想的連続性が断たれたと見做している点であろう。この点に関しては思想史上の枠組みとしては妥当なものであり異論はない。また、報告者は専門を異にするため判じ得ないが、文学史上の枠組みとして「取り上げるべき程のものがない」とする評価もあり得るものである。しかし、「思想的偏向が著しい」ことや「極右の偏向雑誌」であることは、メディア史上の枠組みにおいて閉却すべき理由にはならない。この点において、先述の有山論文は、昭和期を含む『日本及日本人』のメディアとしての特徴を「言論と同人」の視点から明らかにした重要なものである。本報告では、これらの先行研究を踏まえて、五百木良三研究の過程で得られた新知見を加えることで、『日本及日本人』に関する一考察を試みる。

2. 五百木良三と政教社の関係 ～五百木が主宰する以前の『日本及日本人』～

雑誌『日本及日本人』は、明治39年に病身の陸羯南から新聞『日本』の経営権を譲り受けた伊藤欽亮による紙面改革に反発

⁴ この点に関して、佐藤卓己は「戦後の研究パラダイムにおいて、日本主義的新聞雑誌は忘却されたメディアである」という指摘をしている（佐藤卓己（2006）「日本主義ジャーナリズムの曳光弾：『新聞と社会』の軌跡」（竹内洋・佐藤卓己編『日本主義的教養の時代』柏書房、p246）。

⁵ 例えば、佐藤卓己は上記の論稿のほか、佐藤卓己（2008）「キャッスル事件をめぐる「怪情報」ネットワーク」（猪木武徳編『戦間期日本の社会集団とネットワーク』NT出版）、佐藤卓己（2009）「弾圧された右翼ジャーナリズム：昭和言論史の再審へ」（『中央公論』2009年1月号）、佐藤卓己（2012）『天下無敵のメディア人間：喧嘩ジャーナリスト・野依秀市』新潮選書、等を発表しており、本発表においても多くの示唆を得た。

⁶ 五百木良三が同時代人に「右翼」の頭目と見做されていた一例として、原田熊雄の記述を引いておく。「キャッスル大使の着任の後、内田良平なぞと響を並べる浪人の五百木の子分が、直接大使を訪ねて詰問に及んだ」（原田熊雄（1950）『西園寺公と政局』第1巻、p23）。また、五百木良三の死後、同年に死去した黒龍会の内田良平と共に合同追悼会が催されており、このことから五百木が「右翼」陣営の中で内田良平と伍するだけの位置にあったことがうかがえる。

⁷ 例えば、塚本三夫（1968）「『政教社』における組織とイデオロギー：ナショナリズムの思想構造」（『東京大学新聞研究所論叢』17号）、中野目徹（1993）『政教社の研究』思文閣、佐藤能丸（1998）『明治ナショナリズムの研究：政教社の成立とその周辺』芙蓉書房、など。

⁸ 佐藤能丸（1980）「政教社研究案内」（『明治文学全集 月報96』第37巻附録、pp3-4）。

⁹ 松本三之介（1980）「日本及日本人」（『政教社文学集』講談社、pp、初出は『文学』1966年4月号）。

¹⁰ 山田博光（1977）「日本及日本人」（『日本近代文学大事典』第5巻、講談社、pp306-307）。

¹¹ 本山幸彦（1988）「日本人」（『増補改訂 新潮日本文学辞典』新潮社、p960）。

した『日本』の社員たちが連袂退社し、翌年1月から政教社の発行する雑誌『日本人』に合流して誕生した雑誌である。五百木良三が日本新聞社を退社した時期について、この連袂退社と同時期とする説があるがこれは正確ではない¹²。五百木良三が日本新聞社を辞したのは明治36年の秋であり、社友ないし同人としての関係は続いていたであろうが、明治39年の時点では既に日本新聞社に籍はなかった。この頃の五百木良三は、大竹貫一らと城南荘を組織して政治活動を行っていた時期である¹³。

明治40年1月に刊行された最初の『日本及日本人』は、第3次『日本人』の巻号を引き継いで450号となっている。以来、大正12年9月1日発行の869号まで三宅雪嶺が主宰するわけであるが、この間の『日本及日本人』に五百木良三は10篇の原稿を寄せている。それらの中には、先立って同誌上に掲載された中野正剛、細井肇、鷲城鶴崎らの論説に対して、自らが活動する対支同志会の立場から論戦を挑む寄稿もみられた¹⁴。このような浪人としての活動を基にした政論のほかにも、「百年後の日本」や陸羯南の17周忌など雑誌の企画に沿った寄稿もある。これら五百木良三が雑誌に寄せた文章においては、他誌への寄稿も含め一貫して、俳句など文学に関するものには「五百木飄亭」という号を用い、政論などその他の主張には「五百木良三」と本名を用いていた。

大正12年9月1日に起こった関東大震災によって、東京都神田区鎌倉町3番地にあった政教社は焼失してしまう。震災以前から経営的な困難に陥っていた『日本及日本人』(政教社)は、中野正剛らの『東方時論』(東方時論社)と合併することで経営基盤の安定を図ろうと模索していた。そうしたことから、雑誌刊行をめぐる三宅雪嶺と井上亀六ら政教社同人との間に意見の対立が生じ、三宅雪嶺は政教社を離れて新たに『我観』を発刊し、政教社は翌13年1月から第2次『日本及日本人』の刊行を始めた¹⁵。三宅雪嶺が政教社を離れた経緯については、本発表の趣旨から外れるため詳述する暇がないが、大正12年11月に購読者に向けて配布されたと思われる「『日本及日本人』愛読者諸君に告ぐ(三宅雪嶺氏と絶縁の顛末)」という文章から、政教社同人側から見た内紛の経緯を伺うことができる。この文章は『日本及日本人』39号にも掲載されているが、そこには「追記」として「我が政教社の為め旧に依り指導と援助を惜まれざる杉浦重剛先生、内藤鳴雪先生、頭山満先生、国分青崖先生の他左記の諸君が三宅雪嶺氏と絶縁せし同人の心事を諒とし依然執筆援助を諾せられしは同人の深く感激する所也」とあり、第2次『日本及日本人』への協力者として上記4名の他に、五百木良三を含む84名が連記されている。

こうして『日本及日本人』は大正13年1月から井上亀六が主宰することになった。執筆援助者に名を連ねた五百木良三であったが、実際に井上亀六が『日本及日本人』を主宰した時期に五百木良三が寄稿したのは「正岡子規号(160号)¹⁶」に寄せた「追憶断片」の1篇に過ぎない。しかし、この時期に五百木良三が政教社に果たした役割は、原稿の執筆よりも多大なものがあつた。五百木は政教社後援会の発起人となり、経営難救済に助力したのである。震災によって五百木の政治活動の拠点であった城南荘も焼失したため、城南荘グループは大正15年に芝区南佐久間町2丁目17番地に新事務所を落成した。五百木良三は、その空きフロアを政教社に提供している¹⁷。政教社はそれまで、震災後の再刊にあたり四谷区愛住町47番地に仮事務所を置いていた。このように、五百木良三は井上亀六時代の『日本及日本人』に対して、社外から協力する役割を担ったのである。

¹² 例えば、西田長寿はこの連袂退社に関して「長谷川如是閑、丸山幹治、井上薫村、五百木良三ら、旧日本社員はいっせいに退社し『日本人』に依ることになった」と記述している(『日本近代文学大事典』第5巻、講談社、1977年、p304)。正確には五百木の他、丸山幹治も連袂退社の一件に先駆け『京城日報』の編集長として割愛されている。なお、連袂退社の経緯を綴った「広告」に名を連ねた旧社員は以下のとおりである。長谷川萬次郎、花田節、本間武彦、千葉亀雄、小山内大六、渡辺克輔、河東兼五郎、掛場磯吉、武田勇、高木松次郎、井上亀六、古荘毅、国分高胤、古島一雄、鯉坂定盛、荒木恆造、早乙女勇五郎、斎藤言、三苫亥吉、三浦勝太郎、三宅雄二郎。

¹³ この城南荘の性格について、大竹貫一は「城南荘といふものは御承知の通り、櫻田俱樂部が潰れましてから、私どもが京橋の日吉町に移って、城南荘を拵へた。彼處は古く馬場辰猪君や末広鉄腸君のやつてみた共存同楽のあとなのです。吾々の論ずるところは主として外交問題でしたが、苟も国家の綱紀を紊すやうな事があれば、内政問題に関しても真向から叩きつける、肅清する、といふことが城南荘の仕事でありました」と述べている(『日本及日本人』351号、p66)。

¹⁴ 五百木良三(1913)「対支問題弁妄」(『日本及日本人』606号、pp123-132)。

¹⁵ 大正13年1月1日から発行された第2次『日本及日本人』の巻号は継続誌の通号を引き継いでおらず、前誌で連載していた「新聞欄」の回数を引き継いで39号から始まっている(有山輝雄(1977)『雑誌「日本人」・「日本及日本人」の変遷』pp48-49)。

¹⁶ 現時点で『日本及日本人』の復刻版は刊行されていないが、160号「正岡子規号」に限っては、島津書房(2010)から復刻版が刊行されている。

¹⁷ 事務所提供の経緯は詳らかにし得なかったが、五百木良三の死後に刊行された『飄亭句日記』の巻末附録に「大正12年9月の大震災は帝都の半を焼き、京橋日吉町に在りし城南荘も、神田鎌倉河岸に在りし政教社も共に厄に遭へり。15年2月、芝南佐久間町に先生の事務所成るや、城南荘同人は階上に拠り、政教社は階下を占む」(『小伝』『飄亭句日記』p319)という記述がある。なお、「政教社が借りしている城南荘の建物も、五百木の声望に信頼する政財界人の間を、同志の実川時治郎が歴訪し、桂太郎の女婿の長島隆二の協力を得た田中義一大将、池田齋彬、三井合名の有賀長文や平沼騏一郎、藤山雷太、後藤新平などの資金援助によって新築できたものであった」(都築七郎(1974)『政教社の人びと』行政通信社、p181)という。

3. 五百木良三社長時代の『日本及日本人』

五百木良三の城南荘と政教社の事務所が同居してから3年後の昭和4年、ついに政教社の経営に行き詰った井上亀六は、資金繰りのために政財界に顔の利く五百木良三に経営権を譲った¹⁸。この経営権の移譲に関して、柴田青曲は「這間の事は先生（寒川鼠骨のこと：引用者註）の奔走によって決した¹⁹」と、『日本』新聞時代からの古参であった寒川鼠骨が五百木と井上の間に入って取りまとめたことを記している。その寒川鼠骨はこの経緯に関して、「飄亭君は多大の助力を吝まなかったが、経営は震火前の如くならず頗る困難を続けた。昭和4年迄はどうか持続けたが相当に草臥れた。飄亭君に肩代わりを頼み、君は頻りに維新を叫ぶも、旗幟が鮮明でない『日本及日本人』を明治維新に於ける錦の御旗と同様に君が旗幟とし、之を鮮明にせよといふ論で、厭といふのに無理に背負はせてしまったのが昭和4年9月であった²⁰」と述懐している。また、五百木良三が政教社社長に就いた時期と同じ昭和4年9月に政教社に入社した阿部里雪は、「飄亭先生はいつも超然として編集の方にはあまり口出しをしなかった。編集の方に注意したのは神田の猿楽町に移ってから以後の事であり、終わりには自ら筆を執って主張を毎月書くようになったが、これはいよいよ後の事だった²¹」と述べており、実際、五百木良三が『日本及日本人』誌上に自らの主張を論じ始めるのは昭和10年以降のことであったことが確認できる。寒川鼠骨も、『日本及日本人』時代の五百木良三について「尤も初めは他に代筆させたが後には自ら筆を取ったもの²²」と述べており、社長就任当初はほとんど誌面に関与しなかったことがうかがえる。

とはいえ、五百木良三が社長に就任してからの『日本及日本人』にはいくつかの変化があった。まず、10月下旬に井上亀六が退社するなど、政教社を離れた社員や執筆者がいた²³。昭和4年9月1日発行の『日本及日本人』（184号）を前後として執筆が途絶えた人物に、宅野田夫、田中逸平、中野刀水、増島六一郎、斎藤澄雄、馬群丹、雲峯人がいる。このうち、宅野・田中・中野・増野については、昭和6年に井上亀六が頭山満や杉浦重剛を戴いて創刊した雑誌『大日』に寄稿が見られるので、井上とともに『日本及日本人』を退いたものと思われる。例えば、『日本及日本人』誌上において「半月雑記」・「靈犀書屋雑話」・「無邪思野雑記」などのコラムを連載していた田中逸平の場合、184号の寄稿が最後となったが、『大日』創刊号から再び「無邪思野雑記」の連載をはじめている。その中で田中は、「久しく『日本及日本人』誌上に、生活の余瀝に過ぎざる拙稿を寄せたが、之を通じて幾多の知己を求め得たことを感謝してゐる。一昨年同志の変革と与に、予の文縁は同志に無くなった。爾来一年有半我が生活は頗る陰鬱なる日月を続け来つた。岩戸開が出来て茲に『大日』出現と与に再び『大日』誌上に新旧有縁の諸君に見ゆることが出来るのは、洵に更生の感がある²⁴」と綴っている。反対に、五百木良三が主宰したことによって広がった人脈は、小磯国昭や小川平吉といった軍部や政界からの寄稿者に見ることができる。

また、誌面構成上の変化も見られた。井上亀六時代の『日本及日本人』では、口絵の後に「題詞」（漢詩）が置かれ、その後に時事批評を扱う「東西南北」欄が置かれていた。このコラムは後に続く「主張」欄とともに社説格の位置づけにあった。この構成が、五百木良三が主宰するようになってから、185号（昭和4年9月15日発行）では口絵の後に「題言」（巻頭言）が置かれるようになり、186号からは「題詞」がなくなり「東西南北」欄が114頁にまで後退した²⁵。これ以降の巻頭の構成は、口絵、題言、主張の順となった。後述するが、昭和10年以降は五百木良三が「主張」欄を積極的に利用するようになり、名実ともに『日本及日本人』の顔となっている。このほか、第1次『日本及日本人』から続いていた河東碧梧桐の「日本俳句」欄が193号（昭和5年1月15日発行）から「三昧句」欄へと名称変更されるといった変化も見られた²⁶。

¹⁸ 五百木が『日本及日本人』を引き受けるに際して調達した資金は、「幹部の実川時治郎が平沼と懇意であったことから平沼の紹介で藤山雷太から資金を得、その後も小川やあるいは小磯ら陸軍の一部から補助を得ていた」ものである（伊藤隆（1969）『昭和初期政治史研究』東京大学出版会、p431）。

¹⁹ 柴田青曲（2000）「無始無終」（小出昌洋編『隨筆集 団扇の画』岩波文庫、p282。初出は『既』昭和29年12月号から31年12月号）。

²⁰ 寒川鼠骨（1937）「追憶何にや彼や」（『日本及日本人』351号）、p23。

²¹ 阿部里雪（2004）『新編 子規門下の人々』愛媛新聞社、p150。

²² 寒川鼠骨（1937）前掲書、p23。

²³ この頃の様子について古島一雄は、「その後いよいよ『日本及日本人』が保てなくなって五百木瓢亭が入って一緒にやったが、五百木と井上意見が合わぬようになってから、井上は分離して大日社を作ったが、両方ともいけなくなってしまった」と述べている（古島一雄（1975）『一老政治家の回想』中公文庫、p63）。

²⁴ 田中逸平（1931）「無邪思野雑記（1）」（『大日』1号）、p64。

²⁵ 「東西南北」欄はその後、213号（昭和5年11月15日発行）を最後に見られなくなる。

²⁶ この経緯に関して、阿部里雪は「五百木社長は個人的には碧さんが好きな人間でありまた特別な親しみを持ってはいたが碧さんの俳句は好ましく思っていなかった。「碧梧桐のは俳句じゃないよ、それを強いて俳句と言わなければならぬ必要もない、だから三昧なら三昧句と言った

さらに、五百木良三は「政教講座」を新設している。187号（昭和4年10月15日発行）に掲載された社告には、「更始一新、我社こゝに大いに志を天下に伸べんとするに当り、先づ『政教講座』を興し、人心の作興、風教の肅清に努めんとす。学界の権威者、思想界の重鎮を聘して高遠の真理を聴くは勿論、時に憂国慨世の熱論を聴き、隠れたる研究者の蘊蓄を傾けしめ以つて君国に資するあらんとす」とあり、月1回の講演を開催する会員組織の設立を打ち出した²⁷。また、187号には次号を『日本及日本人』革新号として「世界進出号」と題する旨の社告も掲載しており、この188号の革新号をもって『日本及日本人』が本格的に五百木体制の編集になったといえるだろう。五百木良三は折にふれて「世界総合論」を唱えているが、188号に掲載された「日本民族の個性と其使命」からはその主張をうかがうことができる。

五百木良三が社長になってから間もなく、『日本及日本人』はロンドン軍縮条約に反対するキャンペーンに取り掛かっている。五百木は昭和4年11月25日に発足した海軍軍縮国民同志会に名を連ね、「倫敦軍縮条約に関して枢府諸公に呈する書²⁸」を頭山満、菊池武夫、内田良平らと連名で上呈するなど、軍縮問題について諸「右翼」団体と連携した活動をはじめていた。政教社としても、昭和5年4月18日にロンドン会議批判大会を、6月2日には軍縮会議に関して憤死した草刈英治少佐の追悼会を主催するなど運動を牽引し、「雑誌『日本及日本人』は倫敦会議開催以来、最も強硬なる意志を持ち、毎号政府当局の弱腰を難詰し²⁹」たのであった。この頃、軍縮問題に絡んで「右翼」系の新聞雑誌が取り上げた所謂「キャッスル事件」については、その「怪情報の火元が『日本及日本人』であった可能性」が高いとの指摘がなされている³⁰。ロンドン軍縮会議に反対する運動を行っていた当時の政教社について、阿部里雪は「南佐久間町時代における政教社の思い出として、今でも一番私の頭に深くこびりついているのはロンドン海軍会議当時のことであり、この時は政教社が全力を挙げ捨て身になって活躍した。編集の方も、政治運動派の方も一つになって活躍した。（中略）政教社の雑誌の収入、雑誌以外の収入もほとんど大部分はこの運動の方に消費された³¹」と、社を挙げた総力戦で臨んでいた様子を述べている。

4. 五百木良三と国体明徴運動

昭和4年の秋から『日本及日本人』を主宰した五百木良三であったが、当初は表立って論説を載せることはしなかった。五百木良三ないしは飄亭の名を冠した記事は、昭和5年から昭和9年にかけては、毎年平均して1~2篇程度しか見られない。しかし、昭和10年には7篇に増えており、自ら積極的に雑誌に関与するようになっていく。さらに、昭和10年9月には誌面の革新を行っており、それまで1日と15日に発行する半月刊誌であったものが毎月1日に1回発行する月刊誌に改められた。また、この頃から、それまで巻頭を飾っていた「題言」を廃し、「主張」欄を巻頭に掲げて、ここに自らの名義で論説を載せるようになった。五百木良三は当時、天皇機関説を排撃する運動に関与しており、『日本及日本人』誌上において積極的にこの問題を追及するために自ら主筆を兼ねるようになったものと考えられる。

五百木良三は『日本及日本人』318号（4月1日発行）において「所謂機関説問題は昭和維新第二期戦展開の神機」を掲載した。この論文は、国体擁護連合会からパンフレットとしても発行されている。この頃の五百木良三の動きを『句日記』に見てみると、昭和10年3月1日には「夜、日比谷陶々亭小集、天皇機関説打破協議、余主催、会者大竹貫一、菊池武夫、井上清純、井田磐楠、山岡萬之助、赤池濃、木下成太郎、若宮卯之助、葛生能久、入江種矩、増田一悦、其他³²」とあり、機関説を問題とする会合を主催していることがうかがえる。これには、貴族院で美濃部達吉を直接追及した菊池武夫も出席しており、当該事件の中枢に五百木がいたことがわかる。五百木良三はこの他にも、3月7日「飯田町、神宮奉斎会に天皇機関説排撃協議会開催、頭山、今泉、佐藤清勝三氏主催」、3月8日「夜、日比谷、三信ビル楼上に天皇機関説撲滅同盟結成、頭山満翁主催」、3月9

方がいまいだろう」と私に漏らしたことがあったが、飄亭先生は何事によらず思った事はそのまま何らの修辭をも用いず言ってしまう人なので、碧さんにも多分私に話したと同様なことを言ったものであろう、昭和5年1月15日号からの「日本俳句」欄は「三昧句」と改められた」と述懐している（阿部（2004）前掲書、p88）。なお、「日本俳句」欄は碧梧桐の死後、348号（昭和12年5月）から寒川鼠骨の選によって復活する。

²⁷ この会員組織の発足の着想に関係したかは定かではないが、かつて五百木良三は『日本』記者時代に、山本龍之助が立ち上げた日本青年会という会員組織の設立に関与している。なお、日本青年会に関しては山本龍之助（1933）『青年団物語』（NDL 000000757833）に設立の経緯が記されており、新藤雄介（2011）「明治30年代前半における新聞『日本』愛読者団体の位相」（『メディア史研究』29号、pp55-73）が詳しい。

²⁸ JACAR Ref. C08052002400.（防衛省防衛研究所）

²⁹ 伊藤隆（1969）『昭和初期政治史研究』東京大学出版会、p426.

³⁰ 佐藤卓己（2008）前掲書、pp116-117.

³¹ 阿部里雪（2004）前掲書、pp152-153.

³² 五百木飄亭（1958）『飄亭句日記』政教社、pp272-273.

日「午後、青山会館に天皇機関説排撃に就き、国体擁護連合会総会開催、会者五百名に垂んとす、非常に盛会」、3月19日「午後、上野精養軒に機関説撲滅有志大会」といったように、機関説問題に関する諸種の会合に列している。

五百木良三は天皇機関説に関して、「自由民権思想に立脚せる欧米の近代国家が、主権在民を共通観念とするは当然の帰結である。彼等にとって寧ろ人民あつての国家であり、国家あつての統治者である。彼等の統治者が自から国民の公僕と称するの亦た此の観念の発露であると共に、彼等の元首なるものは国家統治上の一機関たるに過ぎぬ」と、西欧諸国における国家法人観について当然視する一方で、「然るに万邦に冠絶せる我が皇国日本の国体は、其の天賦の個性に於て、截然として他と撰を異にして居る。即ち我が日本に関する限り、人民あつての国家乃至元首ではなく、天皇あつての国家であり臣民である」として、日本ではその主客が反すると論じている³³。このような五百木良三の民族主義的な視座は、他の論稿にも一貫して見られるものであった。

5. 結びに代えて

五百木良三は胃を病んで、昭和12年6月14日に没した(享年68歳)。『日本及日本人』には348号(昭和12年5月1日発行)まで主張を書き続けた。現代の視点から五百木の主張を緋けば、言論人としての五百木良三の評価は決して高くはない。しかし、昭和初期にあつて軍部や政府を鞭撻する側にあつた「右翼」の言論が、いかなる論理を持って主張されたのかを知るよすがを、五百木良三の残した業績は示してくれている。五百木良三が主宰した『日本及日本人』は、大まかに2つの時期に分けることができる。当時の社員であつた阿部里雪の言を借りれば、社屋の所在地から南佐久間時代と猿楽町時代とも呼べるが、それぞれの時期においてロンドン海軍軍縮条約反対のキャンペーンや天皇機関説排撃のキャンペーンなど、社を挙げた取り組みがみられた。前期(昭和4年から昭和9年)には「政教講座」を設置した他、執筆陣の変化や誌面構成上の変化が見られ、後期(昭和10年以降)には五百木良三が自らの名を出して「主張」を連載し始めるといった大きな変化があつた。

五百木は自説の「世界総合論」を唱える中で「端的に云へば、吾人は唯だ天授の個性に立脚し、其の総合的使命に向つて行進する以外、他に往くべき路はないのである。即ち我が天皇を中軸として国体の法輪を回転し、皇道日本として1日も速に世界に進出し、そこに人類文化総合の天業を成就せしむると云ふ一事、これが日本民族の地上に生存し得る唯一の意義である」というエスノセントリズムを披瀝している。五百木の論理はすなわち、日本を盟主としたアジア秩序を企図する大アジア主義に基づいているといえる。このような五百木の対外思想は、そもそも近衛篤磨の翼下で「対外硬」運動に参加し、『東洋』を発行していた頃に培われたものである³⁴。五百木は近衛篤磨の薨去に際し、横矢重道に「吾々はこれから葬合戦に取掛らなければならぬ³⁵」との手紙を寄こしているが、五百木良三の政治活動は、その晩年に至るまで近衛篤磨と目指したアジア主義を基底に宿していたのである。従来の政教社に関する研究では、『日本人』からの系譜を捉えて三宅雪嶺の退社を区切りとしてきた。しかし、改めて昭和期の『日本及日本人』を検討するにあつては、新聞『日本』に合流した雑誌『東洋』を加えた系譜で捉えることも考慮すべきであろう。なお、五百木良三の論説は、国体問題とともに外交に関するものも多く書かれているが、これは「対外問題即国体問題の一元性あり、国体の明徴ありて初めて対外方針の決定ある³⁶」といったように、国体問題と外交問題が表裏一体のものであると捉えていたことが理由としてあげられる。

天皇機関説事件によって展開された国体明徴運動は、五百木良三が政治活動の一貫として『日本及日本人』を本格的に利用する契機であつた。総じて、五百木社長時代後期の『日本及日本人』は、五百木の政治活動の機関誌的役割を果たしたと言えるだろう。そのためもあつてか、五百木という屋台骨を失った『日本及日本人』は重松清行が引き継いだものの、しばらくその方向性を定めることが出来ず、結局、新たな体制(社長国分青崖、主幹入江種矩、主筆雑賀博愛)を築くまでに半年以上を要している。五百木良三が主宰した『日本及日本人』は当時の「右翼」系雑誌の中では比較的多くの部数を発行しているが³⁷、その影響力については現代では判じ得ない部分も多く、課題として残される。今後さらなる考察を行いたい。(了)

³³ 五百木良三(1935)「所謂「機関説問題」は昭和維新第二期戦展開の神機」(『日本及日本人』318号、pp2-10)。

³⁴ 五百木良三は『東洋』の編集長を務めた際、近衛篤磨の意見を口述筆記するなど麾下の働きを行った。『東洋』社説に見られる対外思想の一例として、「世界外交界に於ける日本の地位何処に在る、吾国の武名は揚がり、而して其結果は只彼等の猜疑と嫉妬とを招集し得たるのみ(中略)彼等にして人道文明を占奪し、吾国を以て異教民の国異人種の国となし、只異人種異教民なるが故に人道を知らず文明を解せざるものとして度外視し、敵視するが如きことあらば、吾人は真の人道真の文明の為に彼等の迷想を打破せざる可からざるなり」(『東洋』第2巻第3号、p6)。

³⁵ 横矢重道(1937)「近衛公と五百木」(『日本及日本人』351号、p38)。

³⁶ 五百木良三(1937)「順当なる維新過程」(『日本及日本人』345号、p6)。

³⁷ およそ3,000~4,000部。小林昌樹編(2011)『雑誌新聞発行部数事典』(金沢文圃閣)を参照。